

書評

[評者]

阪本奈美子

国立病院機構東京医療センター救命救急センター

多飲症・水中毒

川上宏人
松浦好徳

編

待ってました、決定版!

多飲症・水中毒

川上宏人
松浦好徳

編

待ってました、決定版!

多飲症・水中毒

川上宏人
松浦好徳

編

多飲症・水中毒

ケアと治療の新機軸

川上宏人/松浦好徳 編

B5判 頁272 2010年

定価 2,730円(本体2,600円+税5%)

[ISBN978-4-260-01002-3]医学書院刊

臨床医として仕事を始めて、もう10年以上になる。いろいろなことを、それなりにわかっていたつもりだった。しかし、本当は何もわかっていなかった。何かにガツンと頭をたたかれた、そんな一冊だ。

タイトルを見ると、専門書に思われた。あるいは教科書かとも。しかし、そうだとすると常識を覆す構成である。普通だったら、定義や解説から始まるだろう。本書はなんと「Q&A」から始まる。意外であったが、「なんとなく」知っている多飲症や水中毒に対する抵抗感が一気になくなったのは事実である。そしてのめりこんでいく自分に気づいた。平易な文章でつづられているため、入り込みやすい。それでいて内容の深さにどんどんとはまりつつ進んでいくのである。

読み進めていくうち、まず知ったのは自分の「無知」であった。私は水中毒を知っていたのではなく、低ナトリウム血症に伴うけいれんや意識障害の治療に当たっていただけであった。低ナトリウム血症を呈してけいれんを起こすような状態で患者さんが救急車で運ばれてくると、背景に精神疾患があり、飲水を制限できなかったゆえに「水中毒」に陥ったのだろう、という程度に考えていた。その状態、つまり命が危険な状態になる「前」のことや、そして元の鞘に収まった“あと”のことを気にかけていたことはなかった。単に私は全身管理を行いながらけいれんを抑え、教科書通りのナトリウム補正をして、状態が安定したら、退院あるいは精神科依頼をして自分の手を離す、ということをやっていたのだ。そのことに思い至った。

Q&Aに続く第2部では、山梨県立北病院が水を安全に飲んでもらえるようになるまでの苦難の歴史が、さまざまなエピソードとともにつづられている。ふと気づくとコラムの「たった1杯の攻防」に目頭が熱くなっていた。誰だって(少なくとも私は)思い通りにならない患者の立ち居振る舞いに、陰性感情を抱いてしまう。「患者の飲水行動のみにとらわれ、その患者の人間性を尊重していない、スタッフ中心の看護であっ

た」と反省の一文に象徴されるように、全身状態を悪化させる飲水行動を阻止することばかりにとらわれ、なぜ飲水するのかを考えていなかった。「飲みたい」という気持ちを受け入れ理解を示すことから始まる意識改革のくだりは、その行間に著者らの語りつくせぬ思いが詰まっているに違いない。

そして第3部ではその病因や合併症などが丁寧に解説されている。この一冊が出来上がるためには、実際には書かれていないものの、多くの汗と涙が流されたことだろう。そんな苦勞をしてまでもやらなければいけないのか、と思われるかもしれないが、豊富な経験と膨大な文献資料に裏打ちされていたからこそ、越えられた山なのかもしれないと感じた。この本は、多飲症治療のマニュアルではない。「知る」ことだけではなく、何より大切な「考える」ことも教えてくれる本だ。

まあ、そこまで重くとらえないまでも、まずは手にとってページをめくってもらいたい。表紙のさわやかさもさることながら、その装丁の妙に気づくであろう。部ごとにはそれぞれ「水」にかかわる写真があり、ページ左下の欄外のランニングタイトルには蛇口が描かれている。心憎い演出が、やわらかな文体の奥に秘められた著者らの細やかな心配りと重なり、それに気づいた自分にほくそ笑んだものである。

確かに、多飲症・水中毒について詳しく述べられた書であるが、その向こうには普遍的な、患者と医師の関係、患者とナーススタッフとの関係、また医療スタッフ間関係の持ち方が示されている。患者さんは何を思い、何を望んでいるのか。日々の診療の中で、病気だけをみてしまい、患者さんの気持ちや家族の思いを置き去りにしてしまっていないだろうか。「流して」しまっていないだろうか。患者さんは一人ひとり顔も違うように考え方や感じ方が異なる。私でもできる小さなこと、「今日はお加減いかがですか?」そんなひと言からかけてみようと思う。